

対談「主体的に問いを追究する学習について」

文部科学省初等中等教育局教科調査官 小倉 勝登先生

元聖徳大学教職大学院教授 廣嶋 憲一郎先生

進行：都小社研調査研究部長 新宿区立四谷小学校 石井 正広校長先生

廣嶋先生

主体的に問いを追究する学習について、私なりに話します。都小社研のガイドブックをご覧ください。ガイドブックの中に、3ページにわたって「主体的に問いを追究する学習」について、丁寧かつ具体的に書かれていますので、そちらをお読みいただければ理解いただけると思います。

主体的に問いを追究する学習について考えるにあたり、キーワードがあります。それは「問題意識」、「見通しと振り返り」です。「問題意識」を中心として、子供たちが自ら学習を進めていこうとする、だからこそ、この2つがキーワードになります。では、「問題意識」とは、どのようなものなのでしょう。教科調査官として、小倉先生に解説をお願いしたいです。

小倉先生

実は、初等教育資料3月号の特集は、「自主的・自発的な学習」です。この特集の中で、調査官何名かで座談会をしました。そこで、課題について話をするところがあり、話題になりました。

社会科は問題解決的な学習です。一人一人が自ら問題意識をもって、問題解決に対する見通しを立て、必要な情報を収集したり、読み取ったり、まとめたりして問題の解決を図ります。つまり、「主体的に問いを追究する学習」というのは、社会科の学習の大前提です。

次に、「問題意識」について話をします。前回の学習指導要領実施状況調査の中に、「教師の質問紙調査」というものがありました。その調査の中に、「子供が予想に基づいて、調べる計画を立てるよう指導していますか。」という質問があったのですが、たくさんの質問の中で、この項目については、肯定的回答があまり高くなかったのです。つまり、学校現場であまり取り組まれていないということであり、「学習問題を設定して、子供が自分で計画を立てて、学習問題を進められるように指導する。」ということに課題があるということが分かりました。実際に授業を見ていると、そういったところに課題を感じることも私自身もあります。そう考えると、子供一人一人が「見通し」をもつためには（「見通し」とは、子供たちが問題意識をもって、学習計画に沿って学習問題を解決していくこと）、どのように先生方が子供たちに仕掛けるかが重要になってきます。そしてそれをはっきりさせるためには、子供たちにどのように社会的事象と出合わせるのか、出合わせ方の工夫が大切になります。だからこそ、「主体的に問いを追究する学習」というのは、特に社会的事象との出会いから、学習問題の設定、そして学習計画に至るまでのプロセスを丁寧に行うかがとても重要です。それらを丁寧に行うことが出来るようになるためにも、教師の教材研究が大前提となります。教材研究が行われていないと、どう仕掛けをしていくか考えること自体が難しくなるためです。

廣嶋先生

小倉先生の話の中で、「仕掛け」という言葉が出てきました。以前、小倉先生が社会科教師の授業・学級づくり「仕掛け学」という本を出されました。その中身は、これまで小倉先生がたくさん実践した授業の中で、教材研究の極意について書かれています。小倉先生との長いお付き合いの中で、最初の出合いは、小倉先生が附属小学校の教員の頃でした。当時、様々な形で授業を見せていただいて、私が講師するということが多くありました。そこで見ていただいた授業の中には、たくさんの面白い仕掛けがありました。私も研究協議会に参加したり、授業を見たりする中で、「はてな？（疑問）」や「なるほど」と思ったり、「よくこれを教材として活用したな」と思ったりするものがたくさんありました。中でも私が最も印象に残っているのが、東日本大震災の時に石巻日日新聞という新聞社が作った7枚の壁新聞を使った授業です。これを通してどのような授業をしたのかを皆さんに

お話ししてもらえると、「主体的に問いを追究する学習」に繋がると思うのですが。

小倉先生

この授業を実践したのは、2011年です。私は、震災があって以降、その年はずっと教材研究をしていました。そしてそれを活かして、その年に3本の実践を行いました。壁新聞との出会いは、偶然テレビで見ていた中継です。地域の住民の方々が話をするという中継の映像の中に、壁新聞が映っていたのです。何枚もの手書きの壁新聞が貼られていて、中にはコンビニの壁に貼ってあるものもありました。それと出会い、私は自分なりに「なんだろう」という疑問をもちました。私は授業をつくるにあたり、教材として扱う社会的事象を選ぶ時には、いつも自分の興味・関心を大切にするようにしています。この壁新聞を授業化する時にまず考えたことは、「人物」です。人物をいかに登場させるか、そして人の働きを共感的に捉えさせるにはどうしたらよいかを中心に考えました。つまり、「自分事として考えさせる」ということに関わってくることです。授業をつくることとなり、私自身徹底的に教材研究を行いました。実際に現地へ赴き、テレビ局への取材も何度も行いました。教材化をする上でのポイントは、「人」と「言葉」です。現地に赴き取材をして多くの人と出会う中で、私は震災直後に放送していた佐藤アナウンサーという仙台放送のベテランアナウンサーと出会いました。また、その後、手書きで情報を発信し続ける、石巻日日新聞で働く方々とも出会いました。この出会いは、衝撃的なもので今でも鮮明に覚えています。佐藤アナウンサーは取材をする中で、「改めて報道の役割や報道する責任や使命感を実感した。」「自分たちの役割がやっとわかった。」とっていました。また、新聞社の方々は、「紙とペンさえあれば、何でも伝えることが出来る。今伝えなければ、地域の小さな新聞社なんて存在する意味がない。」「地域住民に早く、正確な情報を伝えること、地域の人たちが今必要な情報をきちんと選び、しっかり伝える。それが自分たちの存在する意味だ。」とっていました。これらの言葉を聞き、これは教材化できると思ったのです。

次に私は、この授業の本質とは何かを考えました。この教材を通して何をねらうのか、単元を通してどのような課題をつかませるのか。私は、先の取材内容から、『伝える』という使命感を教材にすることにしました。その報道の役割や使命感というものを、子供たちに追究して学び取ってほしいと考えました。この、「単元を通して追究し、考える」というのは、新しい学習指導要領の改訂のときにもポイントになったことです。

そしてさらに、そこから私は教材を「分析」しました。これもポイントの一つです。教材化したいと思えるたくさんの資料を分析しないことには、授業にすることはできません。この分析をする際に廣嶋先生からもご指導を頂きながら考えたことは、「4つのフレーム」で考えること、そして次に、「4つの視点」で考えることです。フレームとは、社会的事象を捉え方のことです。教材化するために、どこをどのように見たら社会が見えるのかという視点から、概念的な枠組みで教材を分析して授業を形作っていきました。「4つのフレーム」というのは、現実を見る（徹底的に様子や心情等の事実を捉えること）こと、そして人の営み（思いや願い）を見ること、社会的な意味や価値（背景や要因、影響）を考えること、自分との関わりを考える（子供と教材、自分事としてどうか、社会参画に向けてはどうか）ことの4つです。この4つのフレームに本教材はあてはまるのかを考えていきました。もしうまく当てはまらない、または何か足りないということであれば、教材としての価値を改めて見直さなければいけないということになります。「4つの視点」というのは、社会的な見方・考え方に繋がる内容になります。当時は、人々の営みを関係的に見たり（相互関係）、空間的に見たり（広がり）、時間的に見たり（時間的経過）、複数の立場から多角的な繋がりを見たり、という4つの視点で教材を見直し、これを学習活動の中に意図的、計画的に組み込んでいき実際に単元として学習課題を追究していけそうか考えました。

この教材の面白さは、第一に、人々が生きるための放送をする、第二に生き延びていくための放送をする、そして最後に人々に寄り添っていくような放送に切り替わるという点です。これは実際に授業の主題として取りあげました。また、壁新聞にも同じような面白さがありました。実際に壁新聞を読んでみると、仙台放送の報道の力とまったく同じだと気付くことが出来たのです。その時のニーズに合わせ、提供される情報が変化していくのです。実際に授業をすると、子供たちもそれに気付きました。テレビ放送も、壁新聞も、その時の被災者のニーズに合わせて中身が変わっていく、その時に欲しい情報を伝え、さらに希望を与えていくのです。その点が教材

として非常に面白く感じました。

廣嶋先生

仙台放送も、石巻日日新聞も、私も取材にご一緒させていただきました。先ほどの小倉先生のお話の中にあったような視点から教材について考え、報道の本質とは何であるのかを一緒に勉強させていただきました。そしてちょうど今から1年前、震災10年目の節目となる年に、私は石巻へ行きました。実際に行ってみると、壁新聞は今でも掲示されていました。石巻日日新聞も、現在、発行部数は減ってしまったそうですが、その当時の思いや願いは変わっていませんでした。10年の時が経っても、枯れてしまうような教材ではないと改めて実感しました。

小倉先生

私はこれまで、ずっと廣嶋先生に勉強をさせていただいたり、一緒に教材研究をさせていただいたりしてきました。今までにお聞きした様々なお話の中でも、私は特に「伊能図」のお話が印象的でした。ぜひこの機会にあらためてそのお話を伺いたいです。これは、当時は教科書にも掲載されていない教材だったと思うのですが、教材開発のポイントは何だったのでしょうか。教材研究をしていると、核になる教材と出合うことがありますよね。それをもとに単元や授業をつくることになると思うのですが、その教材研究を行う上でのポイントがあれば教えてください。

廣嶋先生

これが伊能忠敬の作った「伊能図」です。全部で4枚あり、これで1セットです。西日本から北海道まで全てあります。この伊能図はもう使い古したもののなので、昨日取り出してみたらもうボロボロでした。今日話をするにあたって使おうと思い、補修して持ってきました。私はこの伊能図をこれまでに相当使ってきました。授業でも、大学の抗議でも、講演会の話でも、何度となくあちこちで使ってきたものです。

教材開発の一番のポイントは、教材にいかにか惚れ込むかです。ポイントは、この伊能図が手に入ったことです。もし手に入っていなければ、授業で扱うことはなかったかもしれません。現在、伊能忠敬は学習指導要領に載っている歴史人物42人に入っています。しかし私がこの伊能図を手に入れた当時はそれが書かれていませんでした。そこで、伊能忠敬を学習指導要領（教科書）に入れたら、小学校でどのような授業ができるのかと考え、当時の担当の人に見てもらったという思い出もあります。伊能図の存在を知ったとき、私はそれがどのようなものか実際に見てみたいとしかたなかったのです。自分の探求心を抑えることが出来ませんでした。昭和の、インターネットもまだ無い時代だったため、どこに行けば見ることが出来るのかも分かりませんでした。そのため雑誌などを見て調べ、水道橋の地図専門店に行き、ようやく本物にたどり着いたのです。実物を見た時には、趣味としてこの地図を眺めているだけでもとても面白いなあと、とても欲しくなりました。しかし、値段が高く、当時の私の一か月の給料の半分以上の値段がしました。私はせめて1枚だけでも欲しいと思い、店員に尋ねましたが、「セットでないと売らない。」と言われてしまいました。そのため、その時は購入を諦め、駅まで下を向いて歩いていきました。…しかし、駅に着いても、改札の中に入ることはできませんでした。この機会を逃してしまうと、もう伊能図とは出会えないと思いました。その後何分も迷って駅の前を歩き、最終的にもう一度戻って購入しました。

購入後は、この地図をどのようにして使うかを考えました。その中で、現在の地図と比べてどうかと考えました。実際に子供たちにも同じように問いかけてみました。比較してみると、現在の地図とほとんど形が変わらないということがわかります。さらに、丁寧に見ていくと、海岸線に沿って、小さいですが地名が書かれていることもわかります。これは、この地図は海岸線を歩かないと作ることが出来ないためです。また、街道沿いにも地名が入っています。地図は見れば見るほど、「一体これは何だ。」という驚きがあるのです。すると、「どうしてこんなにも現在の地図と変わらないの？」と、驚く子供が大半です。そこで、いつ頃つくられた地図であるのかを子供に想像させるために、江戸時代の道中図と比べさせたことがありました。すると、「江戸時代のものだ。」と、子供たちは誰一人言いませんでした。昭和の初めや大正、明治のものだと考えていました。その後、1821年

につくられたものであると伝えると、そこから問いがたくさん出てきました。誰が作ったのか、どうやってつくったのか、どうしてこんな地図が必要だったのかなどです。子供たちの素直な疑問から学習問題ができ、自然とそれを追究しようとし始めたのです。問題を子供がつくるといのはとても難しく、なかなかうまくいくものではありません。しかし、この「伊能図」については、私が地図そのものを加工をしなくても、自然と子供から問いが生まれ、調べていくことができました。その問いの中には、この地図はどう役に立ったのか、何のために使われたのか、どうしてこのような地図が必要だったのかなど、解決していくのが難しい問いもありましたが、子供たちは最後まで食いついてきてくれたため、追究していくことができました。これはすごいことだと思います。

学習を行う中で、自分たちでも作ることはできないかという声も挙がりました。そこで、当時の私は子供たちとその方法を考え、実践してみました。とても面白い経験でした。今みたいに靴を履いていたのか、当時の人々が歩く時にはどのようなものを身に付けていたのかを調べ、考えていきました。調べてみると、草鞋を履いていることが分かりました。今それを買おうと思ってもほとんど売っていませんが、当時はまだ似たようなものが売っていたため、それを50足購入し、子供たちに履かせて一緒に歩きました。このような私の経験から皆さんに伝えたかったのは、教材はヒットすると子供が自然と問いを生むということです。良い教材であれば、子供から自然と核心に迫るような問いが出てくるものです。だからこそ、教材研究をする意味があるのです。

今回の発表会に向けて、忍岡小の先生方もよく教材研究をして頑張りました。せっかくですから、忍岡小学校の研究について話をしませんか。

小倉先生

忍岡小の研究から、私が素晴らしいと感じたことが2つあります。まず、しっかりと教材研究にもとづいて授業を行っていることです。これはとても重要なことですが、大前提として今回はおいておきます。一つ目として、授業の構成がよく為されているということです。全ての授業がそうではないですが、授業の中で、子供が問いをもったり、問いを共有したりするという場面がありますが、その後先生方はとても丁寧に「予想する」という活動を行っていました。その後、それを確かめるために、調べるという活動をしていきます。そして調べた後に、「自分の言葉でまとめる」という活動を行っていました。その際に先生方は、「正解はないと思うよ。」と伝えていました。このようなスタイルの授業は、非常に参考になるなと思いました。授業をたくさん見ている中では、「めあて」があって「問い」があるという授業を見ることもあります。このような場合は、子供は、どちらに向かえばいいのかが分からなくなってしまいます。今日の授業にはそのような様子は全くありませんでした。さらに、今日の授業では、問いに向かう時に小さなステップがありました。前時の学習内容の振り返りや、動画を見るなどです。このような手立てをたくさん講じて、子供が問いをもつことができるような設定をしていました。これは、私もこの東日本大震災の授業で同じようなことを行いました。この流れというのは、まさに「探求」の流れと同じです。問いをもち、予想して確かめる。そしてそれを共有してまとめる。このようなプロセスがしっかりした授業を今日は見せていただきました。また、もう一つ素晴らしかった点は、教師の意識と役割です。どの先生も、子供の学びを繋ごうとしていました。例えば、教室の環境です。どの教室にも掲示物として、学習の記録がたくさん残されていました。そしてそれを掲示するだけでなく、授業の中で振り返りとして使用していました。それにより、子供の言葉の中にも「前の時間に見たグラフから～」という言葉がありました。これは、既習をどう繋ぐかを先生方が意識していたことの現れです。そのようなことが、子供の発言から見てとることができました。

廣嶋先生

私自身、長いこと、忍岡小の先生方と研究を深めてきました。先生方は、とても熱心で、今日このような日を迎えることが出来てとても嬉しいです。先生方は本気です。教科書にあるものをそっくりそのまま使うのではなく、自分たちでよく考えて、自分で心が震えたような教材を使っていました。これは小倉先生の「仕掛け」と同じ精神なのではないかと思います。そして、学んだことから子供がよく自分の考えを表現していました。これは、本校の研究テーマとして、「自分の考えを提案できる子供」「これからの日本の社会では堂々と自分の考えを発信

できる子を育てたい」をテーマに研究を続けてきたからです。成長を感じることができて嬉しかったです。

都小社研の「社会とつながり未来を創る。」というのは、とてもいいテーマだと思います。これは、授業づくりの中で、子供が本気で考える場面をつくることによって実現するものです。つまり、子供が葛藤し、自問自答する場面がないと、子供は社会に発信していけるようにはならないということです。例えば、4年生の小笠原の授業の中で、「きまりをつくるだけで、自然を守れるのか」「守ることと生かすことを両立させるにはどうすればいいのか」「本当に自分たちにできるのか」と子供なりに葛藤する場面がありました。そのあたりを極めていくことが、このテーマに繋がるのではないかと思いました。

小倉先生

都小社研だからこそその期待とお願いです。一つは、研究理論と授業が乖離しないことです。つまり、シンプルさが大切です。研究授業というのは、授業の準備にあたります。だからこそ、その理論が授業で具現化されてほしいです。研究の良さは、子供の姿で語るのです。研究の成果が、子供たちの姿となって現れてほしいと思います。もう一つは先生たちが社会科を楽しむことです。まずは教師自身が問題解決をしてみしてほしいのです。疑問に思う、解決したいと思う、問題解決に楽しさを感じてほしいのです。教師自身が自主的・自発的に取り組んでほしいのです。ぜひ、先生方自身が楽しんで教材研究をしてほしいと思います。